

聖ヨハネホスピス通信

ISSN 0919-0457



NO. **59**

2014. 6. 20

発行 聖ヨハネホスピス

〒184-8511東京都小金井市桜町1-2-20 TEL 042-388-2888

聖ヨハネホスピスの新しいステージへ

聖ヨハネホスピス 医師 大井 裕子

新緑の美しいホスピスのお庭には、梅雨を前にニゲラの花の群れが美しく咲き誇り病室の一輪挿しにもブルーがちらほらと見られるようになりました。この季節になると群生するニゲラはホスピスのお庭の中で最も好きなお花の一つです。この花びらのように見える、ブルーやピンク、白い部分は、実は「がく片」で花びらではないのだそうです。そして花の後にはぷっくりと膨らんだ実から黒い種が弾けて出てきて、その様子は私たちを楽しませてくれます。別名「クロタネソウ」と言われる所以です。英名はLove-in-a-mist（霧の中の恋人）という洒落た名前です。その花言葉は「未来」「夢で逢いましょう」。ホスピスに咲くニゲラ、こんなメッセージ性のあるお花だったので

すね。
さて、聖ヨハネホスピスはこの春新しい体制になりました。この場をお借りしてみなさまにご報告したいと思います。

聖ヨハネホスピスは、開棟から20年を迎え、これまで受け継いでこられたホスピスマインドのバトンが新しい形で引き継がれました。山崎章郎先生、小穴正博先生、林裕家先生がその大きな役

目をそれぞれに新しいステージに移され、この4月からは三枝好幸先生が新しい部長として聖ヨハネホスピスにおいでくださいました。これまでもホスピスで働いてこられ多摩地区の緩和ケアを盛り上げてこられた先生ですから、聖ヨハネホスピスでのホスピスケアがより質の高いものになることを期待せざるを得ません。先生をお迎えし、もう一度原点に戻り、私達が目指すホスピスケアを見つめ直そうという空気が感じられます。聖ヨハネホスピスのチーム力がより良い形で発揮され、患者さんやご家族によりケアが提供できるよう精進したいと思います。

さて、三枝好幸先生にはこの後じっくりと自己紹介をお願いしておりますので、ここではこの4月から新たに加わっていただきました2名の非常勤医師をご紹介します。東京女子医科大学附属病院、呼吸器内科医の野津朋子先生と埼玉医科大学病院緩和ケアチームの儀賀理暁先生です。

野津先生は、在宅医療に緩和ケアの知識を活かしたいということで1月から3月まで研修にいらしていましたが、引き続き非常勤として週に3回病棟での診療をお手伝いいただいております。と

でも元気のいいキュートな先生です。患者さんのベッドサイドでもパッと明るくする魔法をお持ちです。限られた時間のなかですが、チームの一員として日々熱心に勉強しながらがんばってくれています。先生のお力のお蔭で、常勤医師2名で将来ホスピスへの入院を考慮されるホスピス相談外来や、痛みなどで継続的にフォローが必要な患者さん、あるいは緊急を要する患者さんへの対応が可能となり、これまで以上に多くの患者さんを診療することができています。また、一般病棟での患者さんの受け入れ件数もこれまでよりも増えています。

儀賀先生には週に半日だけですが、病棟と外来の診療をお手伝いいただいております。「お医者さんのお茶っこ」や東京都の緩和ケアの研修会でのご縁をきっかけに先生のお人柄を知ることになり、時間をかけてお願いを続けまずは半日だけですがおいで下さることになりました。同時期にご紹介いただいた患者さんやご家族のケアにもしっかりと時間をかけて下さり、非常にスムーズに聖ヨハネホスピスに馴染んでいただいていると感じております。

新しい先生方の参加で、ホスピスでのカンファレンスにも新しい視点が加わり、これまで以上に充実した議論がなされていると感じています。古き伝統に新しい風が加わることで、より良い形を

模索していけることを期待している次第です。

聖ヨハネホスピスではこれまでもチームでの関わりを大切にまいりました。ボランティアさん、音楽療法士、アロマセラピスト、栄養士さん、理学療法士さん、最近では精神科の寺田先生や臨床心理士さんもホスピスのケアに加わってくださり、病院の中全体でのチームとしての関わりに広がりを見せています。さらに一層チーム全体でよりよいケアを目指していきたいと思っております。

また、ホスピスはお遺族の皆様にも、いつでも安心して過ごしていただける場所でありたいと思っております。お茶を飲みにお立ちよりくださいませ。スタッフ一同お待ちしております。



右から 三枝・野津・儀賀・大井（敬称略）

聖ヨハネホスピスのよりよい運営のためにご支援ください

社会福祉法人聖ヨハネ会は、ホスピスのよりよい運営のために皆様からのご援助をお願いしております。ご援助下さった方々には、今後この通信（年に二回発行）を通して連絡させていただき、ともにホスピスを育てて頂きたいと願っています。一人でも多くの方々がご援助下さることを心よりお願い申し上げます。ご支援の受け入れ口座は以下のとおりです。

銀行振込 三菱東京銀行 小金井支店 NO 4127570
口座名 社会福祉法人聖ヨハネ会（普通預金）

郵便局振込 口座番号 00190-7-711126
加入者名 社会福祉法人聖ヨハネ会
（振込用紙に通信欄に“ホスピスのために”とご明記ください。）

お問い合わせは・・・〒184-8511 小金井市桜町1-2-20 社会福祉法人聖ヨハネ会本部事務局

聖ヨハネホスピスで働くということ ～原点に戻るよ

ホスピス科 三枝 好幸

【特別な1日】

4月1日よりホスピス科部長に就任いたしました。前任地でも約16年間ホスピスの仕事をしてきましたが、前任地に赴任した直後に2週間ほど聖ヨハネホスピスの研修を受けさせていただいたという経緯があり、私のホスピスケアの故郷ともいべきところへ戻ってきたという感じがしています。そのせいか後からスタッフに聞いたことですが、私は当初から聖ヨハネホスピスに溶け込んでいたそうです。もっとも2週間の研修の時も、後で1か月以上はいましたよねって当時のスタッフによくいわれていました。初代部長の山崎先生が自ら掃除をして空けてくださった「office1」という部屋を使わせていただけることになり、窓を開けてみるとさわやかな春風が吹きこみ、屋上ガーデンがすぐわきに広がっていて、初めてこの窓から眺める風景なのになぜかホッとする時間と空間であったのも、私のどこかに「ただいま」とも言いたげな気持ちがあったからなのだと思います。

【最初のオカリナ】

そんなこんなで始まった聖ヨハネホスピスでしたが、4月2日病棟のラウンジで桜祭りがありさっそく「オカリナを吹いてください」といわれ吹きました。このラウンジは私もとてもお気に入りのラウンジで、木で囲まれている割には音響がすごくいいので楽器を演奏するにはぴったりだし、患者さんもお部屋のドアを開けておけばラウンジにでてこなくても聴ける環境にあります。ボランティアさんの手作りのお菓子やお茶をごちそうになったり、何よりも桜が満開で患者さん・ご家族との記念撮影もきっと思い出深いものになったのではと思います。こうした季節の行事も病棟スタッフとボランティアさんの協力のもとに行っていて、よりホスピスらしいひと時でした。

【患者さんのお部屋で】

このとき私のオカリナを聴いた患者さんのご家族が、患者さん本人がラウンジに出てこられずお部屋にいらるのでオカリナを吹きに来てほしいといわれ吹きに行きました。患者さんはこのご家族のお母様でかなり重症で意識レベルも低下していた

のですが、オカリナを吹くと苦顔なく眠り始め、母親と一緒に聴くことができたことを娘さんも喜んでくださいました。私の白衣のポケットにはいつでもオカリナが入っています。なぜオカリナなのかという一番の理由は、いつでもどこでもという手軽さと、魂に語りかけるような独特の音色です。そしてオカリナの音は、人と人をつなぐ大きな力になることを多く経験してきました。私と患者さん、私とご家族だけでなく、実は患者さんにご家族とのつながりや絆をもより強いものにしていく力を持っているのです。音楽はホスピスケアの一部ですが、ホスピスケアは時と場所を選ばない普遍的なものであることを改めて感じています。

【ホスピス緩和ケアを学ぼうと思ったきっかけ】

もう32年ほど前になりますが1982年、外科医を目指していた医学生時代、自分が手術した患者さんが再発して自分のところに戻ってくるならば、最期まで診てあげられるようホスピス緩和ケアのノウハウを身に付けておくのは外科医として当たり前のことと思いました。

その前の年1981年に日本で最初の施設ホスピスである聖隷ホスピスが浜松に開設されたばかりで、ホスピス緩和ケアの教科書も講習会もない時代でしたが、たまたま淀川キリスト教病院の副院長だった柏木哲夫先生が、1973年から院内で行っていたチームによるホスピスケアについてまとめられた「死にゆく人々のケア」という本にであい、1983年に淀川キリスト教病院に見学に行ったりして、ホスピス緩和ケアについて学びを深めていきました。当時、大学病院では末期癌で医者から見放された患者さんたちが、真実を知らされることもなく、いつか治ることを信じ、決して有意義とはいえない入院生活を送っているのが現実でした。私が研修医になって、学生時代に勉強したホスピス緩和ケアをいざ実践しようとしても、当時癌告知率は0.何%で、患者さんに真実を告げようとする上司から反対されたり、死は医療の敗北であり、なんで外科医がそんなことを、と批判的に見られていました。研修医となって1年半ほどして外の病院へ研修に出ましたが、そこでも

緩和ケアについて上司に相談すると、やはり外科の研修医が考えることではないというふうにいわれ怒られていたんです。でももう私としては患者さんに嘘をつき続けるのは限界でした。そこで医者になって3年目にはもう自分の患者に嘘をつくのはやめようと決心し、自分の責任において患者さんと家族に真実を伝え、ホスピス緩和ケアを実践していきました。医者になってまだ3年目でしたから荷は重かったのですが、頑張ることができたのは柏木先生が著書に記されていた患者さんやご家族と向き合おうとする姿勢、すなわちホスピスマインドを学んだことが大きかったと思っています。

【ホスピスマインド】

「ホスピスマインド」はケアを提供する者の根底に流れているものとして、ホスピス緩和ケアでは最も大切なものとして扱われています。シシリー・ソンドース先生はホスピスケアは特定の場所ではなく、ケアの概念を指すとし、人生の最期に際して患者・家族の苦しみからの解放を優先し、尊厳のもとにケアを提供するために働く人々の心のあり方を「ケアリングマインド」として示されました。このソンドース先生の「ケアリングマイ

ンド」を、私たちは今日「ホスピスマインド」と認識しているわけです。また、「ホスピスマインド」はホスピスで働く者だけに当てはまるものではないと私は考えています。「ホスピスマインド」をあえて日本語化するなら「全人的なケアを念頭においた温かくもてなす心を持って、困難や苦痛を抱えている人と向き合おうとする姿勢」とでもいいでしょうか、ケアは時と場所を選ばず、ケアギバーならば誰でも是非とも持ち続けてほしい「このころのありかた」です。

【原点に戻ろう】

そして、聖ヨハネホスピスで働くということは、国内でもトップクラスのチームを作っていくこと、マインドの普遍性を院内外へ発信することが、今の自分に課せられた課題であると感じています。そのためにまずはホスピスケアの原点に戻り、マインドを持ち続けることが最も大切なことだと思っています。

素敵な建物や温かいチームスタッフに恵まれ、患者さんやご家族のためにみんなが心をつなげて質の高いケアができますよう共に頑張っていく所存ですので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

平成25年度寄附金への御礼と使途内訳についてのご報告

単 位 : 円

項目	金額	前年比	内 訳
平成25年度寄付金	4,694,589		個人寄付金、団体寄付金、
雑 収 入	0		
合 計	4,694,589	△4,694,589	
平成25年度使途金	3,531,192	△51,101	Voコーディネーター常勤1名人件費他
	1,319,215	29,243	ボランティア活動備品材料費
	216,080	△216,080	通信運搬費、印刷費
	1,006,340	△198,475	造園委託費、物品費、保険料、雑費
計	6,239,812		
合 計	△2,758,552		

平成25年度も、上記のように皆様から多額のご支援を頂戴しこれを活用させていただきました。本当にありがとうございました。ホスピスでしかできない患者様・ご家族への看護とケアに日々努力してまいりたいと思っております。今後とも、何卒ご理解とご協力をお願い致します。

社会福祉法人聖ヨハネ会 事務局

お詫び

58号におきまして多くのミスがありましたことを心よりお詫び申し上げます。ホスピスも新体制になり、新たな気持ちで歩き始めたいと思いますのでよろしくお願いいたします。申し訳ありませんでした。